



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

地域を守る公共交通

「持続可能な地域づくり」

「廃線の危機を脱したかに見えたが…」

人口爆発だった高度成長時代が去り、出生数の大幅な減少による人口減少社会がやってきました。社会は支える人と支えられる人に大別されますが、支える人が減り続けると、公的年金や介護といった社会保障も財政的に厳しくなり、社会資本も縮小気味で、いわゆる弱者と言われる支えられない人たちの将来に暗い影を投げかけています。

もう40年も前、予讃線に伊予市〜大洲間の山周りの内山線が開通し、私たちの町を通じていた予讃本線が支線になりました。同時期に並行して走る県道が国道に昇格し予算も順調について海岸国道378号は現在の東西ほぼ一直線の立派な国道となったため、「並行路線の一方は潰す」という国



2018年当時のコンサートチラシ

の方針で、海岸周りは廃線の危機に瀕しましたが、やがてはモーターゼーションの時代がやってくるかとほとんどの人が思い、「みんなでも乗って守ろう予讃線海岸周り」などと言いつつ、行政も住民もそれほど危機感もなく時が過ぎていきました。そんな風潮に「何とかしなければ」と立ち上がったのが当時の青年たちでした。無人駅になったJR下灘駅のプラットホームを使って夕焼けコンサートを開催したのです。「無人駅のコンサートで事故でもあったら誰が責任を取るのか」と、JRも行政も青年たちの前に立ちはだかりました。それでも青年たちは瀬戸内海に沈む夕日をシンボルにして、世にも珍しい「夕焼けプラットホームコンサート」を金もないのに一口一百万円の寄付を50万円集め実行に移しました。開催当日は6月22日梅雨の真っただ中でしたが、前日も明るく前日も土砂降りながらその日

は好天という幸運にも助けられ、JR下灘駅は約1000人の人で開業以来埋まり、その模様がNHK西日本の旅で紹介され、一躍脚光を浴びたのです。以来今年まで37回の歴史を重ね、いつの間にか廃線という言葉は聞かれなくなりました。その間蒸気機関車を走らせたり、夕やけビールロック列車や観光列車伊予灘ものがたりが走るなどして観光的脚光を浴び、好評を得ていますが、NHK72時間テレビの放映や、地元の子どもやお年寄りがヒマワリやコスモスを植えたりして地元に根付いた活動で盛り立て、今では全国屈指の有名な「一度は行ってみたい無人駅」として県内外や外国からも観光客が訪れる駅となっています。

ところが一昨年乗降客が少ないいわゆる赤字路線の存続が問題となり、その中にわが町を通る予讃線海岸周りも対象路線に名を連ねていて、国・県・自治体・JRで存続か廃線かの議論が始まろうとしているようです。私たちの町には高校がないため、高校生にとつて配線は死活問題だし、医療機関も整っていないので松山の医療機関に列車で通う人も多く、免許証を返納したり車に乗れない高齢者にとつても生きるためにどうしても残して欲しい路線なので、悲痛的な声が上がっています。

新たな期待 自動運転バスの実証運行…

一方、過疎化高齢化が進む地域での持続可能な公共交通の実現を目指し、伊予市では今年1月31日、自動運転バスの実証運行を双海地域で始めました。2月1日付けの愛媛新聞7面総合欄に掲載された出発式の記事によると、JR上灘駅を基点に翠小学校などを経由して日尾野地区までの往復約11キロのルートで、2月末まで週3日無料バスを運行しました。自治体を対象にした国土交通省の補助事業で、市がソフトバンクの子会社「BOLDLY」(東京)に委託して運行しました。車両は同社が所有するエストニアオーブテック社製で乗員(オペレーター含め)8人乗り、長さ4.2m、幅1.8m、高さ2.5mで、事前に運行ルートの3Dマップをインプットしており、センサーで人や障害物を感じしながら時速20km未満で進み、自動で右左折したり停車したりしますが、実証運行中は市内の運送会社の社員がオペレーターとして同乗し、安全確保のために必要な時にタブレット端末で操作します。今回は運転手が乗車して運行の責任を負う自動運転「レベル2」ですが、将来的には決められたルートを無人で自動走行できる「レベル4」の運行を目

指しています。

実証運行のエリアは路線バスがなく、市が運行するデマンドタクシーで対応していますが、2022年秋に約1カ月間、BOLDLYが市の協力を得て自動運転バスの実証運行をしたところ延べ857人が利用し、住民に好評だったことから、今回は市が同社に委託する形でルートを約3km延長して新型の車両で実施しました。運行日は火・木・土曜日で、午前7時45分～午後4時に5便を運行しました。停留所はふたみシーサイド公園など15カ所でした。私も前回と今回で2回乗車しましたが、のんびりゆっくり走って快適でした。出発式で武智市長は「優しい乗り心地で高齢者が外出しようという動機づけになるのではないか、本格運行を目指したい」と言い、BOLDLYの佐治社長も「将来的には長期的な運航が目標、日常の必需品として楽しく利用してもらいたい」と言っていて、地域住民には久々の明るい話題のようです。

持続可能な地域づくりといいますが、自分たちの力だけで公共交通を守ることはできません。存続が危ぶまれているJR予讃線海岸周りの一方で、新たなバスによる実証運行が他の市町に先駆けて始まるなど地域を守る公共交通環境は不安と期待が

混在する複雑な気持ちですが、願わくばJR予讃線海岸周りは存続して欲しいし、自動運転バスも定着して欲しいと願っています。それにしても無人のバスがわが町を走るなんて、凡人の私にはいまだに信じられません。あなたは信じられますか？



実際に走行する自動運転バス

「本線の 座奪われて 起死回生
無人の駅にて コンサートやる」
「人來ない 誰もが思っ て いたけれど
千人観客 開業以来」
「赤字だと いう理由から 廃線を
国+金+失(国鉄) 赤字なるはず」
「無人バス 実証運行 する時代
時は流れて 進化し続け」
(若松進一 の笑売啖阿)